

▲ 樹里安だより

ジュリアン

2014年
Vol.34



— 安行の名所 (その21) —

紅葉の美しさに芭蕉も魅了

「紅葉のお寺」本行寺 《川口市戸塚4-1-3》



池上本門寺の末寺である本行寺は永正2年(1505)小見山弾正の家臣島根左近が開基、鎌倉本行院日正上人が開山したとされている。

当時から本堂前庭に大山モミジの大木があり、その紅葉の美しさは有名だったが、元禄2年(1689)、芭蕉が吟行の旅の途中、このモミジの話を知り、

同寺に立ち寄り「尊かるなみたや染めて散る紅葉」(直筆は万葉がな)の句を残され、その後高さ90cmの句碑が作られている。樹齢千年といわれたモミジの大木は昭和7年、国の天然記念物に指定されたが同20年3月、空襲時爆撃を受けて枯死した。現在は戦没者慰霊祭に併せ、天皇の御名代賀陽宮がお手植えされた、大山モミジの孫木が現存しており、「紅葉の寺」の由来を残している。

寺はいま客殿の建設及び境内の整備を行っているため、石碑は拝見できないが、住職の當間經宏さんは「寺整備が終わったら適当な場所に安置して皆さんに見ていただきたい」と言っている。

傑傳寺の アカシデ

(川口市東本郷1506)

保存樹木といえば、どっしりと根を下ろし、たくましくそびえる大木と想像しがちだが、この木はなんと幹が痛んで空洞となり、反対側がすけて見えるほど弱々しい。アカシデは山野に生える樹高15mほどの落葉高木で、別名はシデノキ、ソロノキ。紅葉もきれいだが、新芽の葉が薄紅色なのが特徴。

この木が植えられている傑傳寺は、戦国時代の城「本郷城」跡地だったといわれている。

戦国時代、築城に秀でる太田道灌（一部ではその子孫といわれている）が風光明媚な高台に目をつけて築城したと伝えられている。その後、万治時代（1658～61）に江戸幕府の重鎮だった酒井忠勝を弔うため永平寺嶺巖英峻禅師が開山し寺が建立され、信徒を集めていた。その後、神仏分離令、関東大震災、さらに戦後の農地解放などで衰退したが、25世住職や関係者の努力で昭和44年に本堂、55年に客殿新築、境内整備が行われた。

このさい、本堂前に緑がなく殺風景だったことから本堂裏にあったシイの木4本とこの木1本が前庭に移植された。緑の芽ぶきの中に紅色の彩りを添えるのが目的だったろうと推測されたが、この木の名前は当時出入りしていた植木屋さんでも分からなかったため、「珍しい木」で長いことすまされてきたという。

10数年前、保存樹木調査で同寺を訪れた市職員が「この木はアカシデだ。山の木が里に植えられているのは珍しい」と初めて木の名が判明した。この頃、木は痛みが進みだし幹の根元部分にも空洞が見られるようになり、保存樹木の指定について、お寺は「指定を受けても長持ちしそうもないから」と、しぶったが、説得されて平成16年2月17日指定となった。

その時の測量によると胴回り2m、樹高14mだったが、痛みはさらに進み幹は皮だけとなり、枝も半分以上枯れて落ち、残っている数本の枝も枯れ落ちる寸前の状態。このままでは倒れてしまうと2～3年前前に支柱を立て倒れるのを防いでる有様だ。

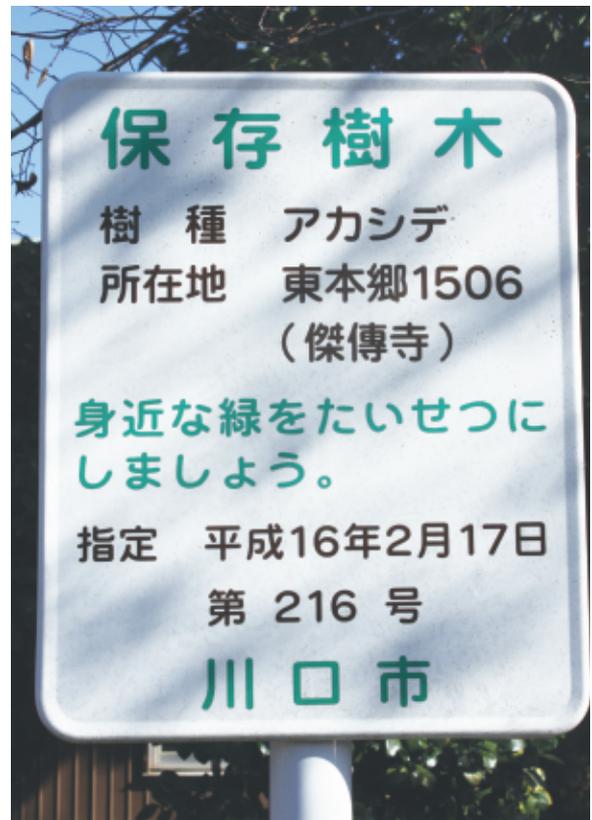
住職の小堤孝雄さんは「明治28年の曾祖父の時代にもうかなり大木になっていたそうでしたから樹齢は200年近くたっているでしょう。もう寿命かもしれないので、強い風などが吹くとハラハラします」と心配顔だが、当の木は残った数少ない枝に春到来を待ちかねていたかのようには芽を大きくふくらませ、生命力のたくましきを見せている。



アカシデ カバノキ科

(別名：シデノキ・ソロノキ・コソネ)

- 学名 *Carpinus laxiflora*
- 分布 北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布する
- 高さ 10m～15m 直径は60cm程になる
- 用途 公園樹、庭木、盆栽など
- 山地や雑木林に比較的に見られる、高木の落葉広葉樹
- 幹は滑らかであるが、縞模様のような筋状の凹凸が見られる
- 長さ 4～8 cmの葉が互生し、萌芽期には赤身を帯びており、秋にも大変美しく黄葉する
- 樹形はケヤキによく似ているが、全体的に小ぶりで、きめの細かさが印象的な樹形を形成する
- 潮風や強風にはあまり強くないが、病害虫の被害は比較的に少ない
- 比較的に湿り気があり、肥沃な土地を好みますが、多少乾燥気味の土地や半日かげ等でも生育する



傑傳寺のアカシデ

樹種	科名	指定年月日	指定番号	所在地	幹周	樹高
アカシデ	カバノキ科	H16.2.17	216	川口市東本郷1506	2.0m	14.0m



よみがえらせる地域の民族文化 赤山渋の生産を再現

顔がゆがんでしまうような柿の渋さは、誰しもが一度は経験したことがあるだろう。生食では敬遠される柿の渋だが、以前は防腐剤、防水剤などとして庶民の生活用品に幅広く使われてきた。特に見沼や綾瀬川緑地の台地で生産された渋は「赤山渋」と呼ばれ、生産がどのように始まったか、その起源は定かではないが、江戸中期においては高値で取引されるほど特産品として名をはせていた。

戦後、化学塗料の発達によって柿渋は衰退したが、赤山・新井宿地域を中心に組織された「新井宿駅と地域まちづくり協議会」（鈴木常久会長）が、まちづくりの一環として赤山渋の風俗文化を生かしていこうと再現させることになった。この活動に取り組んだのは、同協議会草木染部会の井上二三世さんら女性6人。

渋を採る柿は甘柿でなく「マメガキ」等の玉柿。今では化学塗料の普及とともに大半が伐採されてしまったので、木を探すのもひと苦労だったという。

渋の生産は、暑い8月ごろに青柿をもぎとって臼でついて砕き、水を加えて桶に入れモロミ状態にしておくと約一週間で発酵する。この汁をしぼって渋を採り樽で貯蔵する。渋の染料が完成するまで何ヵ月もかかる。もちろん地域の人たちも全面的に協力、3年がかりで染料を作り上げた。

これからが、本番の作品作り、井上さんたちは手始めに布地のマフラー、手さげ袋、和紙や



厚紙での物入れ、小型のチリ取りなどを染めた。技術を伝承する文献などはないので古老たちの話を聞いたり、自分たちで工夫し、染料を濃くしたり、薄くしたり、試行錯誤しながら作品を仕上げた。

こうして完成させた作品は去年10月、新井宿駅前のイベント、新井宿フェスタに参考出品したところ大変好評

だったという。井上さんたちは、さらに範囲を拡げ、渋うちわ・紙型・唐かき作りなどに手をつけたいと意欲を燃やしている。もちろん販売目的でなく、まちづくりの起爆剤とするのが狙い。



「この活動に刺激されて、それぞれの人がそれぞれ

の方法で地域のまちづくりに協力しようという意識が芽生えてくれれば大変うれしい」と話している。

「赤山渋生産用具及び渋小屋」は、昭和62年3月埼玉県有形民俗文化財に指定され、埼玉県立歴史と民俗の博物館に展示されている。

カキ カキノキ科 カキノキ属

- 学名 *Diospyros Kaki*
- 分布 本州、四国、九州および朝鮮、中国に分布
- 高さ 5～10m位
- 果実を食用とするため、国内では広く栽培されている
- 葉っぱは大型で鋸歯のない楕円形である
- 枝は若いうちは灰褐色で、古くなると灰黒色となり、縦に多数割れ目が入る
- 品種の数は800以上と大変多く、様々な形状や大きさの柿がある
- 実生では結実までに8年程かかる
- 甘柿と渋柿に大別され、更に渋の抜け方に応じて、甘柿は完全甘柿、不完全甘柿、渋柿は不完全渋柿、完全渋柿に分けられる
- 果肉内にはタンニン細胞という特殊な細胞が存在し、その中に渋みのもとであるタンニンが含まれる



記念樹にふさわしい木とそのいわれ

子供の成長を願う

コデマリ

(バラ科シモツケ属)
(落葉広葉樹・低木・陽樹)



晩春から初夏の風薫る季節に、真っ白い可憐な花を、小さな手まりのようにつけるのでこの名がついた。江戸初期の園芸本に「小手毬」と記載されているので、古くから日本人に愛されてきたことは確かだが、原産は中国。土地を選ばず、よく生育し、無数の小花をつけるそのけなげさから、子供の将来がすこやかで、無数の喜びにめぐりあうことを願って、七五三などにこの花木を植える。

1. 特徴

開花期 4～5月、結実期 9～10月。生長は早い。

2. 植えるときの注意

時期 3月・9月～12月

場所 特に土質は選ばないが、よく花をつけるためには、適湿で日当たりのよい場所を選ぶ。

3. 管理のポイント

大きくなり過ぎた場合は、花が咲いた後に、伸びすぎた枝を切り詰めて整える。

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



川口緑化センターの主なイベント開催結果報告

1 第75回春の安行花植木まつり

平成25年4月13(土)～14日(日)

恒例の春の安行花植木まつりを今年度も周辺4会場と合同で盛大に開催いたしました。期間中は群馬県沼田市や川口市観光物産協会会員による物産販売や川口市華道連盟による生け花展示とデモンストレーション、人気の花植木オークション、安行幼稚園による作品展示と発表会等が開催され、多くの来場者に好評を博し、広く一般市民等へ緑化の普及啓発が図られました。



2 第11回駒込・安行植木まつり

平成25年4月27日(土)～28日(日)

古くから園芸文化の発信地であった東京駒込と植木の里安行の交流事業である駒込・安行植木まつりを、今年も駒込駅前の染井吉野桜記念公園において開催いたしました。広く緑化の普及啓発を図るため、安行の花植木の展示及び販売や寄せ植えデモンストレーション、PR活動の一環として無料の鉢花配布等を実施し、多くの来場者にお越しいただきました。



3 第4回川口安行の植木・盆栽展 麻布十番

平成25年9月8日(日)～9日(月)

今年も港区麻布十番「パティオ十番」において植木・盆栽展を開催いたしました。本市特産の植木や盆栽の展示販売を始め、恒例となりました、銘品盆栽の展示や盆栽の手入れデモンストレーション等のイベントを実施いたしました。また、外国人通訳、英字表記のチラシ等を用意し、期間中は多くの外国人にもご来場をいただきました。



4 第5回秋の並木元町公園花植木市

平成25年11月9日(土)～10日(日)

川口緑化産業団体連合会と共催でアリオ川口前の並木元町公園において秋の並木元町公園花植木市を開催いたしました。会期中は緑化産業の振興と緑の普及を図る目的で植木・花苗等の展示及び販売、寄せ植えデモンストレーション、マスコットキャラクター「ジュリアン」の練り歩き等を行い、大変好評を博しました。





神話・伝説の花と植物

(その2)

花にまつわる神話・伝説は、目に見えない超自然的な霊物への畏敬の念から生まれたものである。神々は非常に人間的で喜怒哀楽を持っているというが、人間がおよびもつかない力と美しさがある。その神々への親しみとあこがれは美しい花や植物と重ね合わされ、語りつがれてきた。

〔女神クロリスとヤグルマギク〕

ヤグルマギク（ヤグルマソウ）の古い種名はサイアナス。これは春の花の女神クロリスを献身的な愛を持って崇拜した青年サイアナスに由来する。女神の神殿で昼も夜も祈りをささげていた青年はある朝、女神に奉納するヤグルマギクの花輪を作成中、突然息絶えた。女神は彼の献身的な愛を憐れんで、ヤグルマギクにサイアナスという名を付けたという。

〔魔よけになるヨモギ〕

ローマ時代には、ヨモギを身につけて旅に出ると、疲れや熱中症にかかったりしないし、野獣に襲われたりなどの災難を避け、毒薬の害から守られるといわれてきた。中世の文献には、魔女の呪いや落雷を防ぎ、肺病や失明を治すとも記されている。また、聖ジョンの日にヨモギを戸口に吊しておく、悪い精霊が入ってくるのを防ぐとされてきたが、これは日本の端午の節句に、ヨモギを軒先に吊すのと通じるものがある。

〔スミレと神の嫉妬〕

スミレが青い色になったのは、ビーナスのせいだという伝説がある。あるときビーナスが息子のキューピッドに「わたしとスミレとどっちがよく匂うかしら」とたずねたのに対し、「そりゃスミレですよ」と思いやりもなく息子が答えたので、愛と美の女神ビーナスはあられもなく、スミレをむちゃくちゃにたたいた。それでスミレが青くなってしまったというのである。



ジュリアン

樹里安

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成26年3月15日

発行：公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

TEL.048-296-4021

ホームページ：<http://www.jurian.or.jp/>